

# 甲状腺外科草子 17

## 煌々たる燭光：加藤友三郎元帥

杉野 圭三

2012年の某日、広島が誇る第21代総理大臣加藤友三郎の銅像を見に広島市中央公園に行った。



広島市中央公園の銅像

大手町生誕碑 (撮影: 橋部清子)

加藤友三郎 (1861-1923) は広島市大手町で生まれ、修道館 (現、修道中高) で学び海兵7期卒 (卒業時の首席は島村速雄、加藤は次席)。筑紫艦長から第二艦隊参謀長などを経て、島村速雄連合艦隊参謀長の後任となり、日本海海戦に臨むこととなった。



連合艦隊幹部 (右から秋山、加藤、上村、東郷、島村、舟越)

ドラマ『坂の上の雲』では秋山真之や東郷平八郎が脚光を浴びたが、連合艦隊参謀長として日本海海戦を勝利へ導いた島村速雄、加藤友三郎両元帥の功績を忘れることはできない。



記念館三笠 (横須賀)

日本海海戦時の三笠艦橋

戦後、海軍次官、呉鎮守府司令長官、第一艦隊司令長官を歴任。



左：二〇三高地視察、山本権兵衛 (中央)、加藤 (前列左から2人目)、明治39年3月

右：第一艦隊司令長官 (大正12年2月、金剛)

日露戦争後、海軍大臣は山本権兵衛から斎藤実へ替わり、八八艦隊などの海軍充実計画を立てられた。しかし、英国のドレッドノート級戦艦の出現やシーメンス事件で建艦計画は混乱を極めた。

大正4年 (1915)、友三郎は八代六郎海軍大臣の後任として大隈重信内閣に入閣し以後、寺内正毅、原敬、高橋是清の4代の内閣で海相を歴任した。原敬は「加藤という人は平素は黙っているが、何事も正確な判断で結論を出す恐ろしい人間だ」と敬服していた。

日英米間の海軍増強計画は更に激しさを増し、1916年アメリカは「ダニエルズプラン」を立て、英国を抜き世界一の海軍を目指した。ちなみに、1921年 (大正10年) の日本海軍予算の国家予算に占める割合は32.5%になっていた。

大正10年 (1921) のワシントン軍縮会議では首席全権委員として参加。1921年11月13日幣原喜重郎大使主催レセプションでの友三郎のスピーチ：「過剰な軍備負担の軽減は人類文明のために絶対必要である。日本海軍は日露戦争前の恐怖に基づく防衛的なものにすぎず、英米両海軍いずれにも匹敵せんと企図したことはない。後略」。

また、11月15日の第二回総会の発言は以下の通り、「日本は米国政府の軍備制原案に現れたる其の目的の誠実なるを深く多とするものなり。日本は本提案が各国民をし

悪て著しく冗費を免れしめ、且つ必ずや世界の平和を助長すべきを思い満足するものなり。日本は欣然右提案を主義に於いて受諾し、敢然海軍軍備の大々の削減に着手するの用意あり」。この発言に、各国全権や聴衆から「ブラボー、アドミラル加藤」の大喝采が送られた。日本海軍内部には対英米7割死守という強硬派が多く、とても6割では譲れないとの意見が強かった。特に随行員の加藤寛治中將はその筆頭であった。このため、会議は長引くこととなった。



ワシントン軍縮会議（左から幣原喜重郎、加藤、徳川家達）

1921年12月27日、友三郎はワシントンのショーラムホテルで堀悌吉中佐に井出謙治海軍次官宛の伝言を筆記させている。

「即ち国防は軍人の専有物に非ず。戦争も亦、軍人のみにして為し得べきものに在らず。国家総動員にして之に当たるに非ざれば目的を達し難し。平たく言えば、金がなければ戦争ができぬということなり。仮に軍備は米国に拮抗するの力ありと仮定するも、日露戦争後の時の如き小額の金では戦争は出来ず、然らば其の金は何処より之を得べしやといふに、米国以外に日本の外債に依り得る国は見当たらず。而して其の米国が敵であるとすれば、此の途は塞がるるが故に日本は自力にて軍備を造り出さざるべからず。此の覚悟のなき限り、戦争は出来ず。斯く論ずれば結論として、日米戦争は不可能ということになる。日本には八八艦隊計画すら之が遂行に財政上の大困難を感ずる際に当たり、米国がいかに拡張するも、之を如何ともすること能わず。米国提案の10:10:6は不満足なるも、此の軍備

制限案成立せざる場合を想像すれば、寧ろ10:10:6で我慢するを結果に於いて得策とすべからずや（一部略）」

1922（大正11年）年6月12日、加藤友三郎内閣が誕生し、広島市内では祝賀会が催され、提灯行列も行われた。「残燭内閣」と揶揄されることもあったが、シベリア撤兵（10億円の戦費と3500名の犠牲あり）、陸海軍の軍縮にとりかかった。

しかし、1923年（大正12年）7月下旬より体調を崩し、8月24日午前5時、400グラムの下血があり、容体が急変、午後零時35分死去、死因は大腸癌とされている。

海相時代から「軍令部廃止」、「軍部大臣の文官制」を考えており、これらが実現すれば戦前の昭和史も大きく変わっていたかもしれない。日露戦争勝利の幻影に惑わされることなく、軍拡主義の世相の中でワシントン軍縮会議を成功させた特筆すべき第一級の偉大な政治家であり、余りにも早すぎる逝去が惜しまれる。



中央：孫と共に、寡黙で笑わない男の貴重な笑顔

日本近代史の中でも特筆される郷土の偉人に対する認識が低いことは、広島県民として実に嘆かわしいことである。銅像は行きかう人々から注目されることなく黙然と佇んでいたが、その眼差しは『残燭』ではなく、今なお生き生きと輝いていた。

広島市医師会だより、Vol.554, 2012,に掲載されたものを大幅に追加・改訂。

#### 参考文献

工藤美知尋、加藤友三郎と軍縮時代、光人社NF文庫、2011  
（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2022年2月1日